

白描源氏物語絵巻（賢木・花散里・須磨）の再紹介

岩 坪 健

一、はじめに

白畑よし氏が一九六六年に紹介された「白描『源氏物語』絵巻」は室町時代後期に制作され、賢木・花散里・須磨の連続する三帖しか現存しないが、物語中の和歌を全首含み絵は三十図にも及ぶ⁽¹⁾。そのうち賢木全段と須磨前半の一図は宇野茶道美術館に渡り、閉館後には福井県越前市武生公会堂記念館に寄贈された⁽²⁾。また須磨の後半は現在、石山寺に蔵されている。詞書は白畑氏がすべて翻刻されたが、絵は一部しか掲載されていない。今回、所蔵者の御厚意により閲覧・撮影を許可されたので、改めて紹介する次第である。なお当絵巻は紹介者にちなみ、白畑本と仮称する。その書誌については白畑氏が述べられたので本稿では省略し、以下、巻ごとに考察する。

二、白畑本・賢木の巻

白畑本の花散里・須磨の巻は完備しているが、賢木の巻は巻頭の部分（桐壺院崩御まで）が欠落して、現存する第一図の詞書もない。『新編国歌大観』所収の源氏物語歌に付けられた歌番号で示すと、賢木の巻には一三三〜一六五番歌があるのに対して、白畑本の第二図詞書は一四六番歌から始まる。また継ぎ誤りも見られるが、一六五番歌までは揃っている。

現存する白畑本・賢木の巻の絵、全十一図（すべて越前市武生公会堂記念館蔵）を考察するにあたり、次の三作品も参照する。

○略称『絵詞』。片桐洋一氏・大阪女子大学物語研究会編著『源氏物語絵詞』（大学堂書店、一九八三年）の翻刻による。片桐洋一氏の解題によると、天正・文禄（一五七三〜九六年）の写本で、従来の見解は「平安時代以来絵画化されて来た場面を整理総合した」ものであったが、片桐氏は、『源氏物語』に通じた文化人が注文主の依頼に応じて、『源氏物語』全巻から絵にすべき場面を選び、その部分の物語本文を詞書として抄出するとともに、絵とすべき図様を詳細に記述して呈出したもの」と説かれた。賢木の巻は全八項。

○略称『承応』。慶安三年（一六五〇）跋、承応三年（一六五四）版『源氏物語』。挿し絵は山本春正画。当巻は全八図。

○略称『石山』。鷲尾遍隆氏監修・中野幸一氏編集『石山寺蔵 四百画面 源氏物語画帖』（勉誠出版、二〇〇五年六

月)。製作年代は江戸時代中期と推定される。当巻は全九図。

以上の作品の絵（『絵詞』は絵とすべき箇所）を粗筋の順に並べ、白畑本が始まる箇所から通し番号（1～18）を付け、私に見出しを設ける。次に新日本古典文学大系（略称「新大系」）の段落番号（賢木の巻は1～53）を付し、その場面を描いた絵を作品の略称名と、各作品における絵の通し番号（丸数字）で表す。たとえば「1 藤壺邸にて兄の兵部卿宮、光源氏、王命婦と和歌を詠む（新大系15）。白畑①A・絵詞③・石山④。」とは、物語の順では第1項、見出しは「藤壺邸」以下、本文は新大系の第15段、絵は白畑本第一図（図A）と『絵詞』第三項、『石山』第四図を意味する。なお白畑A～Eは注(1)の論文に掲載され、白畑(1)～(7)は本稿の末尾に収める。ただし図Bは注(1)の論文所収の図では一部を欠くため、改めて本稿に図(3)として載せる。

1 藤壺邸にて兄の兵部卿宮、光源氏、王命婦、和歌を詠み合う（新大系15）。白畑①A・絵詞③・石山④。

『白畑』は三人の詠者しか描かないのに対して、『石山』は藤壺や塀の外の家来・牛飼い童も添える。『絵詞』所引の物語本文には「御前の五葉の雪にしほれてした葉かれたる」、説明文には「御まへの五葉に雪つもるてい」とあり、『石山』はその風情を描く。一方『白畑』にも庭に松があるが、雪は積もっていない。ちなみに『白畑』の雪景色は白畑⑥に見られる。

2 宮中にて光源氏、朧月夜と密会（新大系22）。白畑②(1)。

『白畑』には光源氏と朧月夜のほか、矢を背負った武官と直衣姿の人がいる。武官は詞書に「こ、かしこたつねありきて、とら一と申なり」と記された近衛府の者、もう一人は詞書にはないが、光源氏が朧月夜のもとを出るのを目撃した藤少将であろうか。

- 3 藤壺邸にて光源氏、藤壺に近づく（新大系2425）。絵詞④・承応④・石山⑤。
『絵詞』と『承応』は藤壺が失神して人々が介抱するところ（新大系24）、『石山』は回復した藤壺に光源氏が近寄るところ（新大系25）。
- 4 光源氏、藤壺と和歌を詠み交わして藤壺邸を去る（新大系26）。白畑③(2)。
『白畑』は光源氏と藤壺が並んで座り、二人の背後に描かれた笹の葉は壁代の模様であろうか。
- 5 光源氏、雲林院を訪問（新大系30）。絵詞⑤・石山⑥。
『石山』の絵は、『絵詞』所引の物語本文「ほうしはらのあかたてまつる」に当てはまる。
- 6 雲林院に滞在中の光源氏、紫の上と文通（新大系31）。白畑④B(3)。
『白畑』の詞書は光源氏と紫の上との贈答歌であり、絵に描かれた光源氏が机の前に座り、両手で持って広げているのは手紙のようである。また、床に置かれた草花は手紙に付ける折枝であろうか。しかし、二人の僧侶が光源氏と対面し、机の上にある巻物は経巻にも見えることから考えると、この絵の場面は「ほうしはらの才あるかぎり召し出でて、論義せさせて聞こしめさせ給」（新大系30）、または「六十巻といふ文読み給ひ、おほつかなき所々解かせなどしておはします」（新大系33）と想定される。すると『白畑』の詞書と絵の場面は一致せず、この問題に関しては第五章で再考する。
- 7 雲林院に滞在中の光源氏、齋院と文通（新大系32）。白畑⑤(4)。
『白畑』は光源氏の手紙を受け取った齋院（朝顔の姫君）とその女房を描く。
- 8 光源氏、雲林院を去る（新大系33）。絵詞⑥・承応⑤。

光源氏を見送った人々の中に「しはふるひ」または「しはふるひと」がいた、と物語に書かれていて、その語義は不明である。「皺古い」と解釈すれば『絵詞』の説明文にある「老人」になり、「柴振る」と読めば『承応』に描かれた、束ねた柴を背負う男になる。

9 光源氏、雲林院から持ち帰った紅葉を藤壺に贈る（新大系34）。石山⑦。

『石山』は光源氏が自邸で、手紙を書くところである。

10 宮中にて光源氏、藤壺と和歌の贈答（新大系37）。白畑⑩⑤。

御簾を隔てて「けんし」と書きこまれた光源氏は、「藤 中宮」（藤壺）に背を向けている。光源氏と向かい合う女房は取り次いだ王命婦であろう。なお『白畑』はこの箇所から誤って継がれ、物語の順に並び替えると現状の第十回（白畑⑩）が白畑⑤に続き、以下⑩⑨⑥⑦⑧⑪となる。

11 光源氏、朧月夜からの消息に返信（新大系38）。白畑⑨E。

硯箱を前にして右手に筆を持つ「源氏」は、和歌にも詠まれた「時雨」が降る空を見上げている。薄墨で引かれた濃淡のある斜線は、雨を表現している⁽³⁾。

12 桐壺院の一周忌に光源氏、藤壺と詠み合う（新大系39）。白畑⑥⑥。

『白畑』には光源氏の姿はなく、几帳の側にいる女君は「ふちつほの中宮」、もう一人は物語には書かれていないが取り次いだ女房であろう。雪が積もっている庭の松は、詞書の「雪いたふふりたり」に合う。

13 藤壺、法華八講を催す（新大系40）。承応⑥。

『承応』は薪の行道を描く。

14 出家した藤壺、光源氏と詠み交わす（新大系42）。白畑⑦C。

『白畑』には「源氏」と「ふちつほの宮」のほか、藤壺が出家したとき（新大系41）に登場する「ひやうふ脚の宮」と「よ川のそうつ」も加わる。

15 光源氏、藤壺邸を訪れ和歌の贈答（新大系45）。白畑⑧D。

詞書に「ほとけにゆつりきこえ給へるおまし所なれはすこしけちかふ心ふかし」とあり、奥に仏間を設けたため藤壺は端近にいて、今までよりも光源氏に近いと読める。一方『白畑』の絵は仏壇が画面の中央を広く占め、その両側に藤壺と光源氏を配置したので、二人の距離感は遠く感じられる。

16 光源氏、韻塞に興じる（新大系49）。絵詞⑦。

『絵詞』の説明文には新大系の第50段も含む。

17 頭中将、負けわざを催す（新大系50）。白畑①⑦・承応⑦・石山⑧。

三作品ともに頭中将親子と光源氏がいる酒宴の場で、いずれにも酒杯・三方・銚子が見られる。『白畑』にのみ大太鼓が添えられ、これは「御遊び」が行われたことを表す。

18 光源氏、朧月夜との密会を父の右大臣に見つけられる（新大系52）。絵詞⑧・承応⑧・石山⑨。

光源氏が几帳に隠れるさまは、三作品に共通する。

三、白畑本・花散里の巻

白畑本の花散里の巻は絵が二図ある。第一図は中河の女、第二図(図F)は麗景殿女御との和歌のやり取りであり、『絵詞』『石山』も同じ二場面を選んでゐる。一方『承応』は、次の巻名歌を含む第二図しか取り上げない。

橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ

『白畑』『承応』『石山』ともに、和歌に詠まれた橘とほととぎすを描く。光源氏はこの歌を麗景殿女御に詠みかけたあと、女御の妹にあたる花散里を訪ねるので、第二図に登場する男女は光源氏と女御である。しかしながら『白畑』に「けんし」「花ちるさと」と書きこまれているのは、巻名歌が詠まれた場面であるので、その場にいるのは巻名にちなむ女君だと理解されたのであろう。

四、白畑本・須磨の巻

白畑本は一首(二二二番歌)抜けているが、その詞書が二二三番歌の前にあるので単なる書き落としてであろう。絵は全十六図、揃っている。

白畑本の絵をすべて取りあげて考察するにあたり、前章で比較した『絵詞』『承応』『石山』のほか、次の二作品(略称『勾当』『篠山』)の図も参照する。

○略称『絵詞』。須磨は全五項。

○略称『勾当』。宮川葉子氏「白描源氏物語絵巻——後土御門院勾当内侍筆——」（同氏著『源氏物語受容の諸相』青簡舎、二〇一一年一月。初出は『国際経営・文化研究』第六卷第二号、二〇〇二年三月）に翻刻と絵を掲載。識語に「後土御門院勾当内侍女筆」とあり、後土御門院の在位期間は一四六四～一五〇〇年、その間の勾当内侍として四辻春子（一五〇四年没）を宮川氏は推定された。須磨・明石の巻のみ現存する。須磨は全五図。

○略称『承応』。須磨は全八図。

○略称『石山』。須磨は全十四図。

○略称『篠山』。須磨は全十図。狩野典信画を橋本栄保が模写した絵巻。奥書によると、須磨・明石の巻のみ製作された。原本の詞書を分担した筆者の官職から、一七八〇年一月から一七八一年十二月までの間に成立した、と推測される。詳細は注(3)の論文を参照。

右記の五作品に収められた絵はすべて注(3)の論文にて比較考察したので、本稿では重複を避けるため、白畑本の絵の場面のみを取り上げる。よって白畑本にない図は、他本にあっても考察しない。

まず白畑本の絵に通し番号（第1～16図）を付けて私に見出しを設け、新日本古典文学大系（略称「新大系」）の段落番号（須磨の巻は1～36）を付し、白畑本の絵を示す。白畑G～Qは注(1)の論文に、白畑A～オは本稿にそれぞれ掲載する。なお図Lと図Pは注(1)論文の所収図では一部を欠くため、全図（図イ・図オ）を本稿に収めた。図Aは越前市武生公会堂記念館蔵、図イ～オは石山寺蔵であり、所在不明の第3図の絵は「白畑不明」と記す。最後に当該絵が他作品にもあればその作品の略称と、各作品における絵の通し番号を丸数字で表す。たとえば「第5図。光源

氏、父院の御陵に参る途中、三条宮に住む藤壺を見舞う（新大系13）。白畑I・勾当①。」は、白畑本の絵の順では第五図、見出しは「光源氏」以下、本文は新大系の第13段、絵は『白畑』の図Iと『勾当』の第一図を意味する。

第1図 光源氏、大宮と歌を詠み交わす（新大系6）。白畑G。

前掲の五作品は取り上げない場面である。白畑本の絵は明け方に光源氏が左大臣邸を立ち去るところで、数え五歳の夕霧は眠っていると話題にされただけであるが、白畑本は詞書の「心くるしき人のいきたなさ」（熟睡している夕霧）を描いている。

第2図 弟の帥宮と親友の三位中将が訪れる。身繕いをする光源氏は鏡台に映るやつれ顔を見て、紫の上と和歌を詠み合う（新大系9）。白畑H・絵詞②・承応②・石山②・篠山③。

『白畑』と『石山』は帥宮と三位中将を省き、鏡台を見る光源氏と紫の上しかいない。物語では女房は登場せず、『白畑』も『承応』も描かないのに対して、『石山』は坪庭越しに垣間見る二人の女房がおり、『篠山』は二人の女房と一人の下女が接待の準備に追われている。また『篠山』には小道具を多く描きこむのに反して、『白畑』『承応』は鏡台だけである。よって『白畑』は最も描かれたものが少なく、光源氏と紫の上が歌を詠み交わす情景に限定している。これは『白畑』が「素人の手すさび」（注(1)の論文）によるからかもしれないが、最小限に絞ることにより詠歌の情緒を醸し出しているとも言えよう。なお、物語本文にも『絵詞』にも光源氏は無紋の直衣に着替えたとあり、『承応』『石山』は無紋、『篠山』は直衣を着る前である。『白畑』も無紋ではあるけれども、総じて白描の絵では無紋に描くことが多い。

第3図 光源氏、花散里邸を訪問（新大系10）。白畑不明。石山③。

『石山』は光源氏が花散里と語り、別室には二人の女房が控え、崩れた築地塀に絡まる蔦を月が照らす。『白畑』も二人が詠み合う図であろうか。

第4図 光源氏、朧月夜と文を交わす（新大系12）。白畑ア。

他作品に見られず『白畑』のみが取り上げたのは、和歌が贈答されたからである。光源氏は描かれず、硯箱を挟んで二人の女君（「おほろ月夜」と密会を手引きした「中納言宮」^{（中納言宮）}）が向き合う。なお当該図は現在、掛け軸に装丁されている。

第5図 光源氏、父院の御陵に参る途中、三条宮に住む藤壺を見舞う（新大系13）。白畑I・勾当①。

物語本文に「近き御簾の前に御座まいりて、御身づから聞こえさせ給。」とあり、二作品とも御簾越しに語り合っている。ただし光源氏の姿は異なり『勾当』は静座しているが、『白畑』は立って御簾に顔を寄せ秘密の親密さが感じられる。

第6図 光源氏、御陵に参拝する途次、下鴨神社を遙拝する（新大系14）。絵詞③・石山④。光源氏、御陵に別れを告げる（新大系15）。『承応』③・『石山』⑤・『篠山』④。

『白畑』は画面の右側に馬に乗った光源氏と、その前後を歩く従者が一人ずつ、画面の左奥に暮らしいものを配置する。この図は掛け軸に仕立てられ、二〇〇八年の展示『石山寺の美 観音・紫式部・源氏物語』の図録に掲載されている。

第7図 光源氏と東宮とのやり取り（新大系16）。白畑J。

『白畑』は光源氏の手紙を前に置く少年姿の東宮が、一段低い所に控える女房（手紙を取り次いだ王命婦）に伝言

するところを描く。

第8図 光源氏、紫の上と別れを惜しむ（新大系18）。白畑K・勾当②・石山⑥。

『勾当』も『石山』も光源氏と紫の上しきくないが、『白畑』は隣室に聞き耳を立てる二人の女房を添える。その様子は、国宝源氏物語絵巻・夕霧の巻に似る。また『白畑』にのみ唐櫃が三つ置かれ、これは須磨へ運ぶものであろうか。

第9図 須磨に行く途次（新大系19）。白畑Lイ・勾当③・承応④。

『勾当』も『承応』も船中の一行であるのに対して、『白畑』は「源氏」「よしきよ」「さこんのせう」と書かれた三人が室内にいて、浜辺の松原を眺めている。貝が散乱して遣水が流れているところから、詞書に記された「おほいと」といひける所はいたふあれて松はらはかりそしるし成ける」を絵にしたのであろう。物語本文では大江殿を船の中から見て歌を詠み通り過ぎたとも読めるが、『白畑』は上陸して休憩すると解釈したのであろう。なお本図から最終図までは卷子本で、石山寺に所蔵されている。

第10図 光源氏、須磨から女君たちと文通する（新大系21～26）。白畑M・石山⑦・承応⑤。

『白畑』は室内から海辺を見る光源氏の前に、硯箱と教通の手紙を置く。書き終えてこれから送るところであろう。『石山』は光源氏が六条御息所の使者を呼び寄せて話を聞くところ（新大系25）、『承応』は花散里の和歌により屋敷の荒廢を知った光源氏が築地を修復させるところ（新大系26）である。

第11図 須磨でのわび住まい（新大系28～30）。白畑ウ・絵詞④・篠山⑥。

『白畑』の詞書は以下の三場面を一まとめにしている。すなわち、夜中に目覚めた光源氏が独り琴を弾き家来たち

も起きて涙ぐむ（新大系28。白畑ウ・絵詞④・篠山⑥）、光源氏が海を眺めながら読経する（新大系29。勾当④・承応⑥・石山⑧）、光源氏が中秋の名月を見て都に思いを馳せる（新大系30）である。『白畑』が描いたのは「須磨にはいとど心づくしの秋風に」で始まる名文の誉れ高い場面であるが、例は少ない。物語本文の「鼻を忍びやかにみわたす」を『白畑』は鼻紙で、『篠山』は片手で拭う様で表現している。

第12図 大宰の大式、上京する途中、光源氏に挨拶する（新大系31）。白畑O・石山⑨。

二作品とも奥の室内に琴を弾く光源氏、端近に使者（大式の子息）と対面する家来を配置する。

第13図 光源氏、家来たちと合奏（新大系33中盤）。白畑N⁽⁴⁾・篠山⑦。

両作品とも物語本文の「琴を弾きすさび給ひて、良清に歌うたはせ、大輔横笛吹きて遊び給。」の場面を描く。ここでは和歌は詠まれていないので、『白畑』の詞書（新大系33序盤・終盤）には絵に該当する本文はない。また、物語本文の「冬になりて雪降り荒れたるころ」を踏まえて『篠山』は銀世界に彩色し、白描の『白畑』は松や柴垣に積もる雪のほか、簀子に置く丸い物で雪玉を表現しているかと思われる。

第14図 光源氏、若木の桜を見て都を恋しく思う（新大系35序盤）。白畑エ。

『白畑』は須磨に来たときに植えた桜が咲いたのを、室内から光源氏が眺めるさまを描く。

第15図 三位中将、須磨を訪問（新大系35前半）。白畑Pオ・絵詞⑤・勾当⑤・承応⑧・石山⑫⑬・篠山⑧。

中将は須磨に一泊した。絵詞⑤説明文・勾当⑤・承応⑧・石山⑫・篠山⑧は一日め、絵詞⑤説明文と物語本文・石山⑬は二日めを描き、その相違点は馬に表れている。一日めは中将をもてなすため「御馬ども」に稲を与えて見せる、二日めは光源氏から中将への贈り物として「黒駒」を与える、である。『石山』は⑫⑬ともに馬がおり、⑫は小

屋の中に二頭、⑬は庭に引き出した黒馬一頭と描き分けている。『白畑』の馬は画面の右半分、石山⑫と、左半分は石山⑬と同じ描き方をして異時同図法である。また画面の左端に描かれた雁は二日めの題材であるので、右半分は一日め、左半分は二日めに分けられるが、『白畑』の詞書は二日めの本文しかない。『絵詞』も物語本文は二日めのみで、絵の説明文は二日間にわたる。

第16図 光源氏、海辺で祓をする（新大系36前半）。白畑Q・石山⑭。

幕を張り巡らし陰陽師が祓をして、小舟に人形ひとがたを乗せて流すのを光源氏たちが見ている、という物語の内容を『石山』は忠実に描く。『白畑』も構図は同じであるが幕はなく、光源氏は苔むした岩の上に座っている。

五、白畑本の絵 — 詞書との関係 —

これまで白畑本と他作品の絵を比較してきたが、白畑本は和歌が詠まれた場を絵にしている点が他と異なる。たとえば須磨の巻において、光源氏が中将の君と別れを惜しむ図（新大系5）が『承応』『石山』『篠山』にあり、『白畑』にないのは、その場面において和歌が詠まれていないからであり、ここに白畑本と他本との相違が認められる。そのため他作品と共通する絵は少なく、賢木の巻は全十一図のうち四図（白畑①⑤⑦⑪）しかない。その四図も用例は少なく、①はスペンサー・コレクション蔵源氏物語冊子絵にも見られるが、「ほかに類例のない場面」⑥と解説されている。また田口榮一氏が作成された「源氏絵帖別場面一覧」（注5の著書に所収）によると、⑤は個人蔵光起画帖、⑦はバーク本光則白描画帖とのみ似る。よって賢木の巻は珍しい場面が多いと言えよう。ところが逆に花散里と須磨の

巻は、他作品にも見当たらない絵柄が多い。花散里の巻は全二図すべて、須磨の巻は全十六図のうち四図（第14714図）以外が共通する。これは比較する対象が、須磨の巻では二作『勾当』『篠山』増えたことにもよろう。

次に白畑本の詞書と絵の関係に注目すると、両者が一致しないのは二例―賢木の第6項、須磨の第13図―ある。賢木第6項の場合、原因は二通り想定される。一つはもともと二場（新大系31・33）あったが、前の図と後の詞書が脱落した結果、前の詞書（新大系31）と後の絵（新大系33）が一組になったから。もう一つの理由は『白畑』の絵は詞書を基に描かれたのではなく、詞書に合う絵柄を別の作品から探したものに見当たらず、その前後の図を採用したからである。二通りの可能性のうち後者は、須磨第13図にも当てはまる。

当該図は新大系33の中盤に当たりますが、その箇所には和歌がないため詞書は新大系33の序盤と終盤の二場面から成り、絵と詞書は合わない。『白畑』には、柴を焼く小屋のようなものや鳥も見られる。これは『白畑』の詞書に「おはしますうしろの山にしはといふものふすふるなりけり」（新大系33序盤。石山⑩）と、「れるのまとるまれぬあかつきの空にうら千鳥あはれになく」（新大系33終盤。承応⑦）という、絵とは別の場面の文章が含まれているからである。よって『白畑』は詞書にない情景を描くと同時に、絵とは異なる場面の詞書に記された題材も盛り込んでいる。これは他作品の絵を参照したからではなからうか。

須磨第15図も同様に考えられる。『絵詞』は物語本文に即して光源氏お手植えの桜、調度品（囲碁・双六・香道具）、仏具、貝を献上した海人に御衣を授ける、御馬に稲を与える、酒宴、黒駒、雁、琴を列挙する。このうち『白畑』にないのは、授けた御衣と琴だけである。一方『勾当』では桜以外の小道具は皆無で、『承応』は御衣を与える箇所限定している。『篠山』は二頭の馬に水をやる、酒宴の準備、仏具、御衣を賜うの順に展開する。石山⑫は室

内に琴と仏具、縁側に海人の献上品、庭に二頭の馬、石山^⑬は庭に黒駒、室内に光源氏が贈った笛を入れた袋のほか硯箱と懐紙が置かれている。笛は『白畑』にもあり、他作品に比べると品数は多い。しかしながら『白畑』の詞書で絵の題材と重なるのは、「あさほらけの空にかりのわたる御らむして」の雁しかなく、詞書だけでは描かれない。

その一方、須磨第2図のように詞書に記された人と物しか取り上げない絵もあり、これは詞書にのみ基づいて描かれた「素人の余技」(注1)の論文)だからであろう。白畑本が絵によってモチーフの数や種類に差があるのは、他作品を参照したかどうか、すなわち模倣した場合は詳細に描かれるのに対して、参考になる図がない時は簡単な絵になるのではなからうか。

六、白畑本と他の白描源氏物語絵巻

白畑よし氏は、白畑本とは別の白描源氏物語絵巻(葵・賢木・花散里の巻のみ現存)も紹介された^⑬。その詞書は和歌をすべて抜き出す白畑本とは異なるが、絵はよく似ている。賢木の巻は七図からなり、巻頭を欠く白畑本と比較できるのは第三図からである。以下、第二章の第1〜18項と照合して、場面を確認する。なお絵が注⑬の論文に掲載されているのは、第三・六・七図である。

○第三図は第3項の石山^⑮と同じ場面で、光源氏が藤壺の衣装を引き寄せるところ。

○第四図は白畑氏の解説「画面は槿齋院と、侍女の中將との対座で、前にはその木綿(引用者注、光源氏が手紙に付けたもの)がおかれている。」によると、第7項の白畑^⑮と同じ場面である。ただし木綿^⑮は白畑本には見当たらない。

○第五図は第12項と同じ場面。白畑氏の解説によれば、「室内には源氏の姿が大らかに占め、几帳の中には藤壺が半ば身をかくしている。」であるが、白畑⑥には光源氏の姿は見えない。

○第六図は第17項と同じ場面。白畑氏の解説によると、「中将の息で八九歳になる少年が笙を吹いている姿」に「御土器をかたむける中将」と「端然とした源氏が坐っている」図。

○第七図は第18項と同じ場面ではあるが、右大臣が来て（石山⑨）、娘の朧月夜と向き合い（当図）、そして立ち去る（承応⑧）のように三者には時間差がある。また『石山』と『承応』は右大臣・朧月夜・源氏の三人しか描かないのに対して、当図は隣室で聞き耳を立てる二人の烏帽子姿が加わる。この二人を配した構図は、白畑本・須磨の巻・第8図と共通する。

以上の五図のうち、白畑本と共通するのは第四・五・六図であり、とりわけ第四・五図は第二章で比較した他の作品にはない。ということとは第四・五図は彩色画とは異なり、白描絵において継承された図様であるかもしれない。

そこで他の白描源氏物語絵巻を探すと、さらに白畑本と似た作品がある。片桐弥生氏は天文二三年（一五五四）に写されたスペンサー本と、細見家本・天理図書館本とを比較考察され、次の結論を導かれた。

スペンサー本、というよりはスペンサー本の原本は、細見家本、天理図書館本のような『源氏物語』中の和歌をすべて抜き出し、絵画化した絵巻を参考にして制作されたのは間違いないであろう。つまりスペンサー本は細見家本、天理図書館本のような絵巻の抄出本として制作されたと考えてよいのではなからうか。そして一帖から一段を選ぶ基準は、詞は巻名を含む和歌がある段が原則として選ばれた。しかし絵の方は必ずしもそうではなく、絵そのものの面白さや著名な場面であることから他の段の絵が使われたり、数段が合成されたりしたのである⁽⁷⁾。

細見家本は白畑本の三帖を含み、詞書は「ほぼ一致」し、「図様も大方一致するようである」こと、また白畑本と同じ継ぎ誤りもあることから、「両者に共通する祖本に錯簡があった」と片桐氏は論じられた⁽⁸⁾。するとスペンサー本の原本として細見家本と天理図書館本のほかに、白畑本が加わることになる。なお、天理図書館本は白畑本の三帖を欠くので、本稿では考察から外す。

七、白畑本の本文系統

最後に白畑本の詞書本文を取り上げる。源氏物語の本文系統は巻により異なることがあるので、白畑本も巻ごとに考察する。まずは本文が最も短い花散里の巻から調べると、冒頭の一文以外は河内本系統である。以下、詞書を全文引用して、系統により異なる箇所⁽⁹⁾に傍線を引く。

おりふし時鳥なきわたりたりもよをしかほ¹なるに御くるまを²おさへさせ給ふにれいのこれみつをいれたまふ
(二三八八三)⁽⁹⁾

御せふそこと³いふわかやかなる⁴けはいともあまたしておほめくなるへし(三三八七)

いかにしりてかとしのひやかに⁵くちすさみ給ふ(二三八九)

⁶あさはかならぬも人の御⁷もてなしかたに^(6カ)やおほくのあはれそいける(三九〇二)

青表紙本も別本も傍線1の箇所は「なれば」、2は「をしかへさせて」、3「きこゆ」、5「うちすんし」、6「あさからぬ」、7「さま」である。傍線4は青表紙本が「けしきともして」、別本が「けわひともして」と異なり、河内本の

みが白畑本と一致する。

ところが冒頭文は青表紙本が「おりしもほと、きすなきてわたる」、河内本が「おりしもほと、きすなきわたるは」、別本が「おりしも郭公のなきてわたるも」で、白畑本と同じ本文は見当らない。

次に、詞書がすべて現存する須磨の巻を取りあげる。この巻も青表紙本ではなく河内本ではあるが、別本とのみ重なる箇所も見られる。例えば二〇三番歌¹⁰⁾「とこよ出て旅の空とふかりなれとつらにおくれぬほとそなくさむ」（四二四五）の傍線部は、別本の一本である陽明家本とのみ共通し、青表紙本は「なるかりかねも」、河内本は「なるかりなれと」である。ちなみに源氏物語の梗概書類を調べると、白畑本と同文は『源氏物語提要』と版本『源氏物語歌』に見られる¹¹⁾。

和歌は音数の制約があるため散文よりも異同は少ないにもかかわらず、白畑本の和歌には『源氏物語大成 校異篇』には無い本文が散在する。その箇所を以下、歌番号・白畑本・青表紙本等の順に列挙すると、一八九「とまやもあれて―あまのとまやも」、一九七「あまのすむ―あまかつむ」、二〇〇「きこゆる―かなしき」、二〇六「つなてして―つなてなは」である。このような独自異文は散文にも見られ、詞書の歌番号・白畑本・青表紙本の順に挙げると次のようになる。一七七「あまるへかりける―あまるもところせうなん」、一七九「つ、けたまはぬ成へし―つ、けたまはぬ」、一八六「あさからす―あさはかに」、二〇七「うつくしけなり―はつかしけなり」、二二三「御らむして―あるしの君」¹²⁾。この中で一八六番詞書の異同は解釈にも係わり、須磨に退去する光源氏が紫の上と別れを惜しむ場面である。白畑本の本文「あさからすきこえなし給へは」では源氏が紫の上に「あさからす」（愛情深く）申し上げたのに対して、「あさはかに」ではわざと軽く言いなしたとなる。

白畑本の異文の中には物語本文ではなく、梗概文かと思われる箇所が一例あり、それは二一六番歌の詞書である。

けふなんきたれるみのりなれは※人かたつくりてふねにのせてなかすをみ給ふも御身によそへられて

※以下の本文は和歌の直前にあり『源氏物語大成 校異篇』では四三五頁3行目である。一方※までは「やよひのついたちにてきたるみの日けふなむかくおほすことある人は」(四三四13)を梗概化したかと思われる。

最後に賢木の巻を調べると、他の二巻では殆ど見られなかった青表紙本が散見される。一例として一五三番歌の詞書を引用する。

ことおほく侍れとかひなくのみなとすこし心と、めておほかりおまへのはゆふのかたはしに (三五八4)

傍線部が河内本では「かひなくなむ心と、めてすこしまやかにかきたり」であり、陽明家本を除く別本もそれに近く、陽明家本は「おほかり」が「御返」である以外は青表紙本と同じである。

一方、非青表紙本や『源氏物語大成 校異篇』に無い本文も混在する。それがよく分かる例は一五七番歌である。

きこえさせてもかいなき¹物からけにこそむけに²くつおれにける身のうきほと 源氏大将

あひ見すて忍ふる頃の涙をもなへての³秋の時雨とやみる (三六四1)

傍線1は独自異文で、青表紙本と国冬本以外の別本は「ものこりに」、河内本は「ことの葉のけに」、国冬本は「物ともに」である。傍線2は青表紙本と一致し、河内本は「かれ侍に」、別本は「しほたれ侍に」または「しほれに」か「しをれ侍りに」である。逆に傍線3は河内本・別本と同じで、青表紙本は「そら」である。

賢木の巻にも梗概文が一箇所(一五四番)ある。

^a光日の御子^b中宮あまに成らせたまひ御代かはり給ふて^c大ききさひの御こゝろ^dさかなくて^eむくみせむとし給

ふに☆おなしみかきのうちなからかはれることおほくかなし

☆以下は三六二頁12行目の物語本文であるのに対して、☆以前のは該当する本文が見出せない。まず傍線a「光日の御子」という言葉は、『源氏物語大成 索引篇』に見当たらない。傍線bの「中宮」は藤壺を指し、「輝く日の宮」（桐壺の巻）と呼ばれている。bに「中宮あまに成らせたまひ」とあるが、この時点では出家していない。傍線c「大きさひ」（弘徽殿太后）は当巻にも四例あるが、すべて他の場面に使われている。dの「さがなし」（三四三五）とeの「報い」（三四六一）は当巻に一例ずつあり、「さがなし」は詞書では弘徽殿太后の性格を表わすが、物語ではその父右大臣の形容である。「報い」は物語も詞書と同じで、太后が「むくひせむとおほす」と記す。

八、終わりに

鎌倉時代に藤原定家が校訂した青表紙本は、室町時代になると和歌における定家崇拜の影響により他系統の本文を圧倒し、江戸時代には流布本になる。一方、室町後期に制作された白畑本は非青表紙本であり、青表紙本が優勢になる以前の状況が窺える。

白畑本の絵は原則として和歌が詠まれた箇所であるため、名場面であつても和歌がないと描かれず、そこが彩色画と違う点である。ただし実際には詞書にない部分も描かれ、これは別の絵画資料を取り入れたからと考えられる。白畑本は細見家本と似るため白畑本のみの特徴ではなく、彩色画とは異なる白描画独自の図様が継承されていたのであろう。江戸時代になると描かれる場面が固定化するが、室町時代に制作された白畑本はまだ定着する前の有様を残し

ている。ゆえに白畑本の絵も本文も、近世に定型化する以前の状態であり、その点においても貴重であると言える。う。

注

- (1) 白畑よし氏「白描『源氏物語』絵巻」、「日本美術工芸」三三九号、一九六六年二月。
- (2) 越前市武生公会堂記念館の図録「源氏物語千年紀特別企画(4) 源氏絵―王朝の雅を垣間見る―」(二〇〇八年一〇月)には、宇野茶道美術館蔵「源氏物語絵巻 一卷」が掲載されている。
- (3) 雨の描き方に関しては、以下の論文の注(4)を参照。岩坪健「狩野典信原画・橋本栄保模写「源氏物語絵巻」須磨・明石の巻(丹波篠山市立歴史美術館蔵)の紹介―土佐光貞「源氏物語須磨図絵巻」(ハーバード大学美術館蔵)と住吉廣行「源氏物語須磨巻絵巻」(斎宮歴史博物館蔵)との関わり―」、「人文学」二〇五号、二〇二〇年三月。
- (4) 図Nは注(1)の論文では第11図とするが、現状では第13図である。白畑よし氏の解説も第13図の方が合う。
- (5) 『豪華「源氏絵」の世界 源氏物語、学習研究社、一九八八年六月。
- (6) 白畑よし氏「白描源氏物語絵巻に就いて―源氏絵の図様の一資料として―」、「美術史」56、一九六五年三月。
- (7) 片桐弥生氏「白描源氏物語絵巻における絵と詞―スペンサー本を中心に―」、「フィロカリア」6、一九八九年三月。
- (8) 注(7)の論文。なお細見家本の影印は注(7)の論文のほか、『日本のデザイナー』(日本の意匠 新装普及版) 1 (二〇〇一年九月、紫紅社)にも一部収められている。
- (9) 漢数字は『源氏物語大成 校異篇』の頁数、洋数字は行数を示す。なお青表紙本の定義は、本稿では『源氏物語大成』による。
- (10) 和歌の番号は、『新編国歌大観』による。
- (11) 稻賀敬二氏「源氏物語梗概書にあらわれた中世の流布本文研究―源氏物語和歌異文一覽 1―」、「広島大学文学部紀要」二四卷三号、一九六五年三月。
- (12) 物語では「あるしの君」は二二二番歌の直前にあるが、白畑本では二二二番歌が欠落して、二二三番歌の前に「御らむし

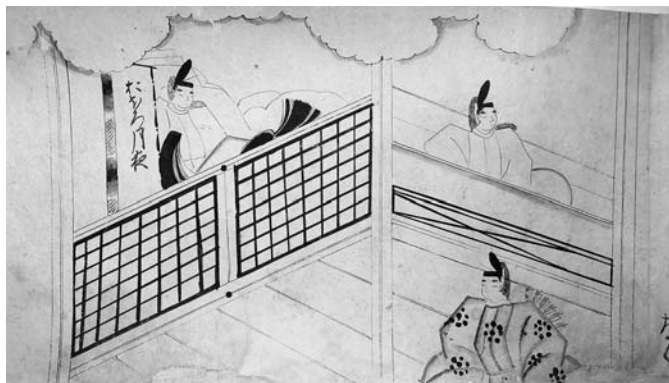
白描源氏物語絵巻(賢木・花散里・須磨)の再紹介

白描源氏物語絵巻（賢木・花散里・須磨）の再紹介

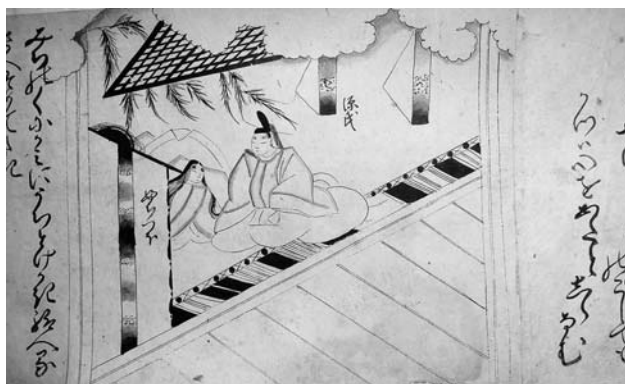
て」がある。

〔付記〕

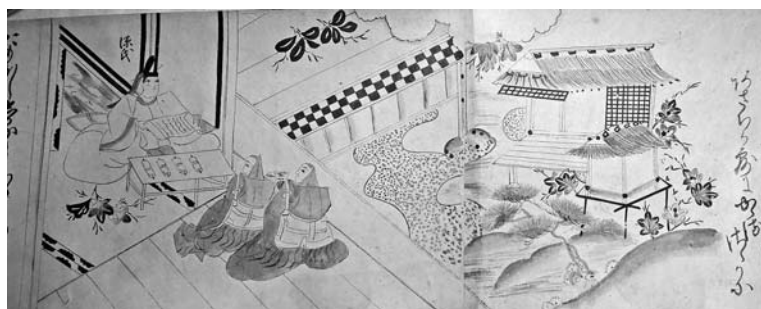
貴重な白描源氏物語絵巻を見せていただきました、石山寺と越前市武生公会堂記念館に深謝し申し上げます。



図(1)



図(2)



図(3)



図(4)



図(5)



図(6)



図(7)



図ア



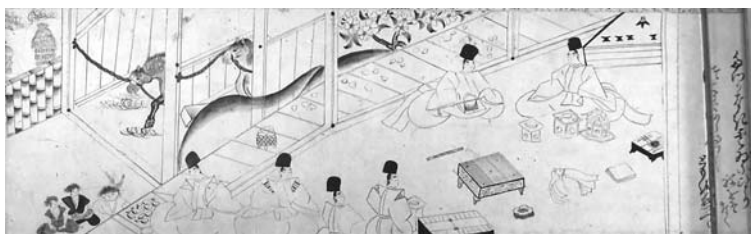
図イ



図ウ



図エ



図才前半



図才後半